

広告 企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

萩と有田の技法を継ぎ、新たな作陶に挑む

松尾 優子 山口県/萩陶芸作家(日本工芸会正会員)

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:レクサス)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

「匠」のモノづくりに挑む「匠」を応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家)、東京大学教授)、ゲエナエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)、アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠匠研究所)らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。



萩市の「松尾藻風窯」で開かれたエリア・コンサルティングの様子



1月18日、プレゼンテーションにて

昨年夏、レクサスギャラリ―高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に

クトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出すとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。山口県選出の匠、萩陶芸作家・松尾優子さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。



スーパーバイザー 小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

伝統の中に革新としての「絵付け」を

萩焼は高い浸透性を持った日常食器として使用するにはもろく、敬遠する人が多いという。しかし土や上薬、焼成を工夫することで既存の萩焼より強度があり、かつ長年使用することで色が変化化する萩焼本来の魅力も備わった器となる。

今回のプロダクトは、サポートメンバーの下川氏が「松尾さんの『絵の力』を引き出すのに最適ではないか」と提案した日常食器「豆皿」となった。当初「全く頭になかった」という松尾さんだったが提案を前向きに受け入れ、ここから、萩焼らしい「伝統」と現代に生きる作家としての「革新」、萩の「地域性」を兼ね備えた器を作る挑戦が始まった。

陶器と磁器の魅力を生かす作陶を

400年の歴史を持つ伝統工芸、萩焼。茶の湯で使う陶器「茶陶」で名声を得、楽焼、唐津焼と並び称される。現代の萩焼作家は、使い込むにつれ色合いなどが変化する「萩の七化け」などに代表される独特の魅力と、上薬や焼成技術の進歩で広がった可能性を前に個性の発露に苦しんでいる。

松尾さんは萩焼の窯元「松尾藻風窯」で、父であり師匠の藻風氏のもとで生まれ育った。一方、同窯は磁器で有名な佐賀県の有田に起源があり、自らの作陶家としてのスタートもまた有田だった。

有田窯業大学校で上薬、デッサン、水墨画、絵付けなどの技法を身に付けたのち、藻風氏のもとで萩焼の技術と表現を学ぶ修行に入った。しかし陶器と磁器では作り方が全く違い、萩に戻ってからの作陶は、修行と自らの作品を生み出す苦難と挑戦の日々となった。

芸術品に昇華する萩焼の作陶の奥深さは材料や工程において無限の試行錯誤を要する。松尾さんには有田で習得し、自らも自信を持つという絵付けの技術を生かすという強い思いがあり、「絵付けと萩焼の相性の悪さ」という萩焼の歴史で多くの先



「その時代の『ときのもの』を意識した作品を作り続けたい」と話す松尾さん

革新としては従来萩焼にない「絵付け」を取り入れた。たくさんの色を使わず、松尾さんが思うレクサスブランドに合う色として墨具須(すみぐす)水墨画のような濃淡をつけた。

地域性としては「ふく」

まいった。焼成方法は伝統の「御本手焼成」(窯中を酸素不足にして焼くことで全体や部分の色合いにオレンジ色などの変化を促す陶芸技法)で、いわゆる「萩焼と言えはこの色」という淡いシンプルな色で焼き上げた。

(山口県では伝統的にフグのことを「ふく」と呼ぶ)を描き、二枚で一匹のふくが完成する仕様とした。「二枚を合わせると一つの絵になる」というのは、現代感覚だと思ふ」と松尾さん。「今を生きる私たちは先人の伝統をふまえ現代的なものを作ることが大切」と

一般客が求める作品も作り続けている。

「今回のプロジェクトで私につけてもらったコピー『人とは違う、自分だけの手法で、萩焼に新風を』は、私の心を言い当て、これからの作陶人



白壁が続く萩の街並み

人たちが試し挑んだことへの挑戦もあった。

原点をみつめ、個性を生かす

「私は有田で修業を始めた身。その経験は萩焼作家としての私の個性の大きな一つ」と松尾さん。萩焼での個性の発露に苦しみながらも、決して自らの出自を裏切ることなく数々の国内工芸展で入賞する萩焼作品を生み出す一方、



松尾 優子 山口県/萩陶芸作家(日本工芸会正会員)

人とは違う、自分だけの手法で、萩焼に新風を。山口県萩市出身。佐賀県有田窯業大学校卒業。陶器と磁器の両方をこなす作家として、幅広く多彩な作品を生み出している。父、藻風に師事。日本伝統工芸展入選4回、九州山口陶磁展受賞3回、女流陶芸展受賞1回、西部伝統工芸展受賞1回、山口県美術展覧会受賞3回、山口伝統工芸展受賞1回。



作品に込める思いを語った。

趣といわれる温かさを感じて

豆皿は小さな器だが、作る工程や手間は他の器と変わらない。「小さな器ゆえに使う人を魅了する何か」を求めいづつも試作品を作った。「ふく」を描くにもまた惹きつけるものはと見え、あえて写実的に描かず必要最小限の運筆(筆の運び)で描いた。少ない運筆で「ふく」と分かるには試行が必要だった。また、大きく見せる、広がりを見せることも考え、器からはみ出すデザインにした。

「日本にはいろいろな伝統工芸品があり、萩焼の歴史も古く私たちが大事にしてきた伝統が器の中にはある。磁器などの洋食器にはない趣とも言われる温かさを感じてほしい」と話した。

生に大きな推進力を与えてくれた」と松尾さん。これまでに以上に力強く自らの道を歩み続け、陶器も磁器も、そして今回のプロダクトのような新しい個性をも併せ持つ作品を生み出していく。



完成プロダクト「豆皿」